

No_13 (2002,3,15) Potent corticosteroid cream (mometasone furoate) significantly reduces acute radiation dermatitis: results from a double-blind, randomized study.

Asa Bostrom, et al.

Radioth and Oncol 59(3):257-265, 2001

目的: 放射線皮膚炎は最も頻度の高い副作用だが evidence-based treatment が欠けているので、ステロイドクリームの効果は evidence level の高い方法で検討した。

研究デザイン: prospective, double-blind, randomized study.

患者: 49 人の乳癌温存手術後の照射患者

治療法: mometasone furoate cream (MMF) または emollient cream をランダムに割り付けた。24 Gy までは週 2 回、その後は照射終了後 3 週まで 1 日 1 回塗布した。以後は emollient cream を毎日塗布した。

エンドポイント: 放射線皮膚炎 (発赤と色素沈着)。計測には reflectance spectrophotometer と visual scoring 法を用いた。

結果: MMF は emollient cream 単独と比べ有意に急性放射線皮膚炎を減少させた ($P=0.0033$)。色素沈着では差がなかった。

臨床への適応: わずか 24 例と 25 例の比較でも、best evidence (double-blind) となる。大掛かりな臨床研究だけでなく、単独の施設でも手の届く規模で特殊な内容のものでなくても研究対象は見いだせる。伝統的に行なわれていた治療や処置の検討でも、見直すべきものがたくさんある。これらの研究は国際的に通用する臨床研究法を身につけるためにはよいトレーニングとなると思われる。
(齋藤 勉)

No_14 (2002,3,22) Reirradiation for locally recurrent lung cancer previously treated with radiation therapy.

Yoshiaki Okamoto et al.

Int J Radiat Oncol Biol Phys 52(3): 390-396, 2002

一般的に肺癌の放射線治療成績は、化学療法の併用を行っても 5 年生存率が 7~10% と不良である。その理由は遠隔転移のみならず局所再発も多いことである。再発癌の治療は放射線療法にも化学療法にも抵抗性を示し困難である。さらに再照射は放射線障害のおそれがあるため適用できる症例は少なく、その文献的報告も少ない。

1979~2000 年に天理病院にて肺癌再発例に再照射された症例は、非小細胞肺癌 27 例、小細胞肺癌 6 例、他 1 例、計 34 例であった。再照射時の臨床病期は I 期 または II 期 2 例、IIIa 期 5 例、IIIb 期 14 例、IV 期 13 例で、PS は 0~1 が 14 例であった。18 例は根治目的で 16 例は症状緩和目的で、いずれも 1 日 1.5~3.0Gy の分割照射がなされた。再照射時の照射野は腫瘍部に限局して行われた。初回照射の線量は 30~80Gy (中間 60Gy)、再照射の線量は 10~70Gy (中間 50Gy)、根治目的再照射の線量は 30~70Gy (中間 50Gy)、総積算線量は 56.5~150Gy (中間線量 110 Gy) であった。脊髄積算線量は 50Gy 以下とした。化学療法は再照射時は 16 例で併用された。結果は根治目的再照射例では CR6 例、PR8 例であり、症状緩和再照射例では 12/16(75%) に症状の改善が得られた。再照射後の生存率は 1 年 43%、2 年 27%、中間生存期間 8 ヶ月であり、根治目的再照射例の生存率は 1 年 77%、2 年 51% で、6 例の 20 ヶ月以上生存例が得られた。中間生存期間は根治再照射例で 15 ヶ月と選択例ではあるが再発肺癌例の治療としては良好であった。Grade 4~5 の放射線肺炎、放射線食道炎は認めなかった。心臓、食道、気管、脊髄などの線量に注意が必要である。最近、頭頸部癌、脳腫瘍、直腸癌に対する再照射の報告が多く見られ、再照射の有用性が認識されて来ている。肺癌の局所再発例に対する外部照射による再照射は、根治的にも対症的にも安全に行うことができ有効であると結んでいる。

以上、肺癌の再照射は適応は限られるものの、適切な照射を行えば良好な結果が得られることを示した論文である。私見であるが温熱療法の併用も推奨される。
(寺嶋廣美)